

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表
 学位規則第8条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

フリガナ 氏名(姓、名)	トミイ ナナミ 富井 奈菜実		授与番号 甲 1606 号
学位の種類	博士(社会学)	授与年月日	2022年 9月 25日
学位授与の要件	本学学位規程第18条第1項該当者 【学位規則第4条第1項】		
博士論文の題名	幼児期における系列化の発達—円系列課題の実証的検討に焦点をあてて—		
審査委員	(主査) 竹内 謙彰 (立命館大学産業社会学部教授)	荒木 穂積 (立命館大学産業社会学部名誉教授)	
	田村 和宏 (立命館大学産業社会学部教授)		
論文内容の要旨	<p>本研究は、発達相談等の場で用いられることがある円系列課題の実証的検討に焦点をあてて、主として幼児期における系列化の発達の様相を明らかにすることをめざしたものである。本研究で扱われている系列化とは、認知発達の領域では物事を順序だててをいう。Piagetによると系列化は、具体的操作段階に形成される認知体系である群性体のうち、「関係についての操作の規則のまとまり」(園田, 2009, p. 117)として位置づけられている。つまり、系列化は子どもの発達、特に論理的思考の発達において注目すべき重要な認知機能である。また円系列課題とは、机上にB4紙と鉛筆を提示して「この紙に一番小さい丸から一番大きい丸まで、だんだん大きくなるようにできるだけたくさんの丸を書いてください」と教示し、子どもに描画させる課題である。この課題は田中昌人の「可逆操作の高次化における階層-段階理論」(以下、「階層-段階理論」)において5、6歳頃の系列化の発達を把握する方法の一つ(田中・田中, 1988; 服部, 2020)として位置づけられており、「階層-段階理論」を理論的根拠に据えた発達診断場面でよく用いられている。</p> <p>本論文は5部構成である。このうち第I部(1~3章)では、系列化の発達と円系列課題に関わる先行研究のレビューを行い、本研究の学術的な位置付けと、本研究で明らかにすべき課題を明らかにしている。第II部(4~5章)では、幼児期から学童期前期の系列化の発達について実証的検討を行なっている。第III部(6~7章)では、系列化が始まる幼児期を対象に、円系列課題の発達の位置について、多変量解析(多重応答分析ならびに階層クラスタ分析)により析出された発達の基本構造との関連で検討している。第IV部(8章)では、日本とベトナムにおいて新しい発達診断法の開発を試みた研究に基づき、円系列課題の臨床への応用可能性について検討している。第I部からIV部までに明らかとなった知見をふまえて第V部(9章)で総合的な考察がなされている。</p> <p>円系列課題は系列化の発達を捉えるものであり、Piagetのいう群性体が形成されるまでの過程を積極的に捉えうるものでもある。加えて、子どもの発達を診断する方法として簡易であるという点でも魅力的な方法である。しかし、その一方で円系列課題における系列化の発達の実証的検討は十分に行われてこなかった。よって、本研究では幼児期における円系列課題を指標とした系列化の発達過程について実証的検討を行うことが主たる目的とされた。</p> <p>先行研究レビュー(1~3章)の結果、円系列課題における系列化の発達はおおよそ3つの時期に区分されると考えられた。第1の4歳頃では系列化は十分には成立しないが、その芽生えがみられる時期、第2は系列化の始まりの時期(5歳半ば頃)、第3は系列化が安定する時期(6歳頃)である。こうした先行研究の知見をふまえ、本研究では、①系列化の芽生えから、系列化が始まっていく移行の様相(4章)、②系列化が安定し、確実になっていく過程の様相(5章)、</p>		

<p>論文内容の要旨</p>	<p>③系列化の発達と発達段階との関連（6～7章）、の3つの点について幼児ならびに小学生を対象とした実証的検討がなされた。</p> <p>その結果、円系列課題にみられる発達の様相は、4歳以前の系列化ができない時期、4歳半ば～5歳頃の系列化の芽生えの時期（3個の円系列描画が可能になる）、5歳半ばころの系列化が始まる時期（4個以上の円系列描画が可能になる）を経て、6、7歳頃の系列化が展開する時期（6、7個以上の円系列描画が可能になる）に至ることが明らかになった。なお、系列的に描画された円の個数増加は、展開の時期までは年齢の上昇と関連していたが、展開の時期に至ると両者の関連は認められなくなり、むしろ個人差が大きくなることも明らかとなった。加えて、多変量解析により析出された発達の基本構造内における新版K式発達検査等の検査課題との関連から、円系列課題の展開の時期は3次元形成期（田中・田中，1988）と呼ばれる5、6歳頃の発達段階に位置づくことも明らかになった。また、日本とベトナムにおいて円系列課題を含む新しい発達診断法の開発を試みた研究の結果、地域差や文化差を超える共通の発達の基本構造を見出すとともに、基本構造内の類似点と相違点を明らかとなった。これらを踏まえ円系列課題の普遍性と臨床への応用可能性が示唆された。</p>
<p>論文審査の結果の要旨</p>	<p>本論文は、発達のアセスメントの現場において用いられることのある円系列課題に焦点をあて、その発達過程の様相ならびに発達段階における位置づけについて、理論的ならびに実証的に検討を行ったものである。</p> <p>系列化の発達にかかわって、まず Jean Piaget ならびに田中昌人の論稿を読み解き、円系列課題の理論上の位置づけを行った。すなわち、Piaget は系列化を認知体系である群性体の一部を構成する操作と見なし、完成態から幼児期を未熟な状態として位置づけているのに対して、田中は群性化という用語を用いて完成に至るまでの系列化の発達プロセスを重視していること、そして、そのプロセスを捉えるうえで円系列課題はふさわしいものであることが指摘されている。研究対象とした円系列課題の発達上の位置づけをこのように整理したことは高く評価できる。</p> <p>また、そうした課題の理論的な位置づけをふまえて、円系列課題にかかわる実証的な先行研究を丹念に追って検討課題を整理したうえで、幼児期前半から学童期はじめまでの子どもを対象とした一連の実証的研究によって、円系列課題によって認められる系列化の発達過程の様相を明らかにした。すなわち、円系列課題が系列化の発達の初期から展開までの発達の变化をとらえるのに適した課題であるとともに、その完成期の特徴を捉えるには必ずしも適していないことが実証的に明らかにされた。発達指標としての特徴を実証的に明確化したことは高く評価できる。さらに、発達診断の諸項目（円系列課題を含む）を分析した日本とベトナムの比較研究においても共通の基本構造が析出されたことは、円系列課題が地域差、文化差をこえる普遍性ならびに臨床への応用可能性をもつものであること示唆するもので、この点も従来の研究を発展させたものとして高く評価できる。</p> <p>ただし、いくつか研究上の課題も指摘できる。第1は、系列化の発達を測定する様々な指標の中での円系列課題の位置づけの明確化である。すでに本研究内においても、棒や円カードの配列課題のような知覚的手がかりが豊富な指標との比較を行っているが、知覚的あるいは運動的な手がかりが乏しいもの（例：重さの系列化や時間の系列化など）との比較などが求められよう。第2に、実践に適用する際の課題である。対象児の反応を発達的に評価するための基準の明確化が求められるだろう。本研究では、系列的に描画された円の個数が基準として妥当だと判断されているが、発達段階を区切る際に適切だと考えられる個数は、展開のレベルにおいては先行研究と微妙に異なっているところがある。こうした点をどのようにみて、より適切な評価基準を設定するかは、引き続き検討が期待される課題となっている。</p> <p>ただし、こうした課題は指摘されるものの、これらは、上述した本研究の理論的ならびに実証的な貢献による到達点にたつて、今後さらに深めていくべき課題と位置付けられるものである。</p> <p>以上のような論文の評価に加え、公聴会での口頭試問結果を踏まえ、本論文は博士学位を授与するのに相応しいものと判断した。</p>

試験または学力確認の結果の要旨

本論文の公聴会は2022年7月15日（金）10時40分より12時10分まで、衣笠キャンパス以学館1階産業社会学部大会議室での対面ならびにZoomによるオンラインにより開催された。

本論文の前主査（荒木穂積）ならびに現主査（竹内謙彰）は、申請者の本学大学院社会学研究科応用社会学専攻博士課程後期課程の在学期間中における学会発表ならびに学術誌への投稿などの様々な研究活動を支援するとともに日常的に研究にかかわる指導と相談を行い、その中で、申請者が研究者として必要な力量を着実に獲得してきたことを確認した。

また主査および副査は、公聴会における様々な質問に対し申請者が適切な応答を行ったことを認め、申請者が博士学位にふさわしい能力を有することを確認した。

したがって、審査委員会は本学学位規定第18条第1項に基づいて、博士（社会学 立命館大学）の学位を授与するにふさわしいと判断した。